

極早生タマネギのトンネル・マルチ栽培による3月収穫技術

「淡路島たまねぎ」では、冷蔵品出荷終了の2月から早生タマネギ出荷が始まる5月の端境期を埋める作型が求められている。極早生タマネギを9月10日頃播種し、トンネル・透明マルチ栽培することで慣行栽培に比べ収穫時期は2～3週間早い3月中旬となり、収量は34%増加し、約4.5t/10aが得られた。

内容

「淡路島たまねぎ」は吊り玉、冷蔵による長期出荷を特長とするが、冷蔵品出荷終了の2月以降、5月の新玉シーズンまでの3～4月は端境期となる。消費者・実需者からは、淡路産の周年供給が期待されており、この端境期対策として、トンネルやマルチを利用した3月収穫技術について検討を行った。

品種「^{はまえみ}浜笑」（カネコ）を、9月10日頃に播種し、288穴セルトレイで約50日育苗後、定植した。試験区は、透明マルチに12月10日頃トンネル被覆した「トンネル・マルチ区」及び「透明マルチ区」、 「黒マルチ区」、「裸地区」の4区とした。

収穫時期は、慣行栽培となる「裸地区」の4月上旬に対し、「トンネル・マルチ区」で3月中旬、「透明マルチ区」で3月下旬、「黒マルチ区」で3月末と前進した。また、3か年平均の可販収量は、「トンネル・マルチ区」で4.5t/10a、「透明マルチ区」で3.9t/10aと「黒マルチ区」や「裸地区」に比べ多かった(図)。

透明マルチ栽培で問題となる雑草対策として、マルチ被覆時のキルパー同時散布により、長期間にわたり高い除草効果が得られ、施肥量は、慣行基準の窒素成分20kg/10aに対し、全量基肥施用で最大4割の減肥が可能であった(データ略)。

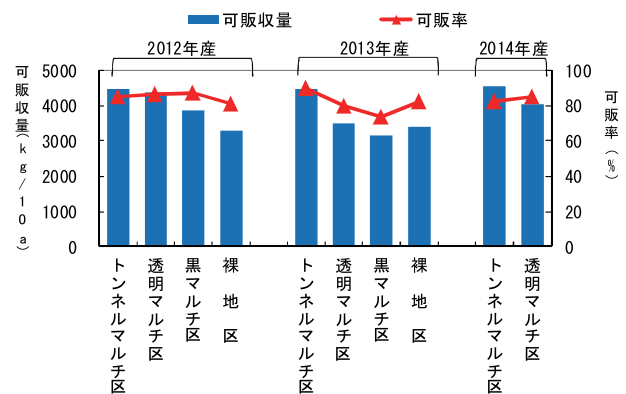


図 栽培方法が品質、収量に及ぼす影響

今後の方針

生産コストの低減を図るため、裸地にトンネルを組み合わせた早期収穫作型について、適切な播種時期などを継続して検討する。

西野 勝 (淡路 農業部)

(問い合わせ先 電話：0799-42-4880)



写真 栽培方法別の収穫時地上部の生育